

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22614011

研究課題名(和文) 21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究 - ベルリン外国人集住地区の事例

研究課題名(英文) Citizens' Movements in the 21st Century: An Anthropological Study of Kreuzberg, Berlin

研究代表者

森 明子 (MORI, Akiko)

国立民族学博物館・民族文化研究部・教授

研究者番号：00202359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代の社会的紐帯、ソーシャルなるものを理解するために、ベルリンの外国人集住地区の市民運動を民族誌的に研究するものである。クロイツベルクの市民運動には、1960年代半ばの「新しい社会運動」、1980年代初頭の「都市運動」、そして現代という三つの相がある。現代の運動は、公と民が協力するプロジェクトを多く含み、移民もドイツ人も、個人として、あるいは団体として参加する。その社会的紐帯を、二元論で理解することはもはやできない。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to explore contemporary forms of social bond and concepts of the "social." In order to achieve this aim, I conducted ethnographic research on citizens' movements in Kreuzberg, Berlin. I analyze the development of citizens' movements from the mid-1960s to the present and elucidate which people engaged with such movements and how. Citizens' movements in the period under study can be divided into three phases; the "new social movements" of the mid-1960s, the "city movements" of the early 1980s, and contemporary movements. Contemporary movements are characterized by their style of execution: such movements encompass projects that are hybrid in composition, incorporate both the private and public sectors. People with and without immigrant backgrounds are engaged in these projects, either as participants in associations or as individuals. Social bonds constructed in these movements are no longer grasped along dualistic dividing lines.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：共生・排除

キーワード：文化人類学 社会学 社会福祉関係 都市計画・建築計画 国際情報交換 ドイツ 民族誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、近代世界を支えていた社会原理が見直しを迫られているという問題認識から出発している。今日、私たちが「ソシアルなるもの(社会的なるもの)」ととらえているものは、19世紀のヨーロッパの国民国家建設と産業化の文脈で鍛えられていった概念である。社会科学もこの時期に学問として体系化されたし、社会国家(福祉国家)やソーシャルワーカーという制度も、この歴史的社会的文脈で成立し、整えられていった。現代、産業構造は大きく変化し、グローバル化の進行とともに国家が担う意味も機能も変容している。この状況下で、私たちは社会をいかに構想したらいいのか、その見取り図を失っている。ジャック・ドンスロが指摘しているように、ソシアルなものは、アンシャン・レジームの社会から自由主義と民主主義によって特徴づけられる産業社会を作り上げるのには役立った。だが、現代において、ソシアルなるものは新たに構想しなおさる必要がある。

(2) 新しい社会像を模索する動きは1960年代ころから「新しい社会運動」としてあらわれた。アラン・トゥレーヌを嚆矢として、アルベルト・メルッチ、ユルゲン・ハーバーマスらが、主要な論者として議論を展開した。注目すべきことは、20世紀末から21世紀にかけて、これらの議論が世界のあちこちで見直されていることである。日本でも、彼らの議論は、公共圏、リスク社会論、コミュニティ論、アソシエーション論と共鳴し、社会思想、政治学、社会哲学などの分野を横断するテーマになった。一方で、現代都市の日常の文脈で起こっている運動を、このような視点からとらえて、民族誌的に記述した研究は、まだほとんどない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、現代世界の新しい社会像を構築しようとする試みとして、市民運動に注目し、運動がいかに展開しているのか明らかにしていくものである。ベルリンの外国人集住地区で展開する市民運動やプロジェクトに焦点をあてて、文化人類学の民族誌研究としてアプローチする。この記述と分析を通して、どのような社会像があらわれつつあるのか、明らかにすることを最終的な目的とする。

(2) 本研究の4年の研究期間にすることは、市民運動がどのような交渉や軌道修正を行いながら人々を動員し、実践されているのか、そのプロセスを明らかにすることである。さまざまなアクターの存在と、その相互関係に注目する。ドイツ人住民、多様な文化背景をもつ移民、さまざまな任意団体、行政などが、ここで注目する主要なエージェントである。ただし、それぞれのカテゴリーが一枚岩であるわけではない。重なり合いながらズレをも

つ関係に注意し、その歴史的な展開過程を明らかにする。

(3) 都市の外国人集住地区における住民の社会関係を扱う本研究のテーマは、文化人類学研究において1990年代から新たに起こってきた「場所」をめぐる議論に連続する。本研究を、場所をめぐる人類学の都市研究として位置づける。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、文化人類学の民族誌研究として、現地フィールドワークにもとづいた記述と、その分析から構成される。調査地はベルリン・クロイツベルク区の一角をなす街区である。

20世紀後半から21世紀にかけて、東西冷戦の分断都市から再統合都市へ転換したベルリンの経験は、外国人と総称される移民や難民の生活にも、決定的な影響を与えた。冷戦下で、外国人募集労働者から移民家族へとその位置づけを変えていた人々は、壁崩壊後、出身国との関係、都市における位置を、あらためて問い直されることになった。このような彼らの存在が、20世紀末以降の市民運動に影響を及ぼしている。彼らの存在を除外した社会の構想は、ありえないからである。その様相を明らかにするために、本研究は、外国人集住地区に焦点をあてた。

(2) 研究の視角

本研究は、第一に、歴史的な展開過程をとらえる視角と、第二に、ローカルな事象を同時代のグローバルな世界との接合からとらえる視角を意識し、第三に、全体を民族誌研究としてまとめあげていく視角でのぞむ。

歴史的な展開過程をとらえる視角

冷戦からポスト冷戦へ、ベルリンは壁撤去、東西再統合を経て、ヨーロッパを代表するグローバル都市へと展開しつつある。調査地の人々にとって、この過程は、政治的経済的な諸条件の大転換であるだけでなく、日常生活の物質的、空間的な変更として経験されている。草の根の市民運動が、こうした変化のなかでどのように展開してきたのか、とらえる。

同時代の事象の接合をとらえる視角

1990年代以降の運動を考えると、ローカルな文脈での運動が、より拡大的な文脈といかに接合するか、ということは、きわめて重要である。運動のアクターは、さまざまなネットワークを構成して影響しあっているが、そのネットワークの広がりや、現代の運動においては、きわめて広範でかつ複合的に作用するためである。

市民運動の民族誌という視角

移民や難民の人々に注目しながら市民運動の民族誌という視角のもとに問題をとらえることで、たとえば、移民研究が対象を移民に限定することで見えなくなってしまうネットワークも、とらえようとする。

(2) アプローチ

研究遂行にあたっては、次のアプローチをとった。

特定のローカリティのもとで行われる市民運動および運動のアクターに関する、それぞれ個別の資料収集（インタビューによるオーラルデータ、紙媒体文字資料、画像・映像資料、ネット上のデータ）

実際の運動への参与観察（陪席・参加）

アーカイブ化された資料および統計の収集・整理・分析（図書館・文書館、統計局の資料渉猟）

運動関係者との意見交換。

国内外の研究者コミュニティとの議論・意見交換。

(3) 研究協力者

ベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ民族学研究所所長であるヴォルフガング・カシュバ教授、ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館館長であるエリザベス・ティートマイヤー教授を研究協力者として、調査研究をすすめた。

4. 研究成果

(1) 調査地の市民運動の系譜

1960年代以降、この地区で展開してきた市民運動の歴史的な展開を明らかにした。第二次世界大戦後、東ベルリンとの境界に位置する調査地の街区一帯では、大規模な都市再開発計画が構想された。計画は70年代に着手されたが、当時の住宅政策への批判と相まって激しい反対運動／闘争が起こった。地区の内外、西ドイツからも若者や運動家が参加した市民運動が、1970年代以降、展開した。

調査地では、プロテスタント教会牧師のリーダーシップのもとに、組織的な運動が展開し、行政と交渉して都市再開発計画を根本的に方向転換させることに成功した。街区の全面的な取り壊し計画は、建物の改修・再利用を含むソフトな再開発計画へ転換し、建物再利用を含めた都市再生のためのプロジェクト案が広く公募された。この公募事業は、牧師をリーダーとする市民運動グループの協力のもとに実現し、1978年に11案が採用された。予算を措置されたプロジェクトを後方支援するための組織もつくられ、新聞発行も含めて、市民運動のネットワークを生かした活動が、展開していく。

ところで行政は、一方で、公募から11案を採用し予算を措置しながら、他方で、市民の反対を無視した建物取り壊しもすすめた。このような行政に対する不信から、都市運動は数年の間、劇的な高まりを見せる。内外から多種多様なアクターが運動に関わった。地区の住民、商店・工房の小経営者、家主、学生、芸術家、建築家、行政担当者、政治家が直接交渉し、メディア、ベルリン市民、資本家らの言動も運動を構成した。地区住民のうち、ドイツ人は低賃金の労働者や失業者で、

移民家族も含めて、社会的には立場の弱い人々だった。

80年代の活動を通して、公募採用されたプロジェクトの一部は、当初の目的を達成して解散し、一部は他のグループに継承され、また一部は活動を発展的に継続する任意団体を形成した。

一方、ベルリンをとりまく政治的経済的状況は、90年代に大きく変化した。ベルリンの壁崩壊を経て、東西ベルリン再統合と再首都化、同時に進行したEU統合、ユーロ導入による経済的影響と再-政治都市化が進行する。街区の人々の生活に直接的な打撃を与えたのは、さまざまな福祉政策の後退だった。

こうした経緯を経て、2000年代の運動では、これまで市民運動や住民のためのプロジェクトを主体的に展開してきた任意団体が、行政との協力関係をつくり、あるいは更新しながら、地区住民（ドイツ人と移民の背景を持つ人々を含む）を動員し、さらに、各種の学校団体や文化団体、商店や会社も巻き込みながら、活動を展開していく形が現れている。

(2) 市民運動の同時代的展開 - 具体例

移民主体の街路清掃運動

街区でおこなわれているさまざまなプロジェクトのなかで、とくに焦点をあてて、詳細に調査を行なったもののひとつが、街区の清掃運動である。21世紀初頭に成立し、その後成長していった。

移民に対するホスト社会の側の関心は、社会統合である。だが、移民を、主体性をもつ住民として位置づけようとするなら、ホスト社会がマジョリティとして、マイノリティの移民を統合しようとする一方的な包摂関係には限界がある。こうした統合政策に異を唱える立場から、街区の日常生活のレベルにおいて、さまざまな文化背景をもつ移民第二世代の人々が中心になった運動が展開している。そこでは、移民の人々が主体となって、ドイツ人住民や任意団体とネットワークをつくり、市民運動が展開している。街区清掃運動は、そのような運動のひとつで、ストリートの掃除をとにもするとともに、ストリートの口述の歴史を伝える活動である。運動の成立、組織、構成、展開、背景、動員、成果、副産物などについて、継続的な参与観察と、多様な参加者へのインタビューを中心に調査し、分析した。

保育園運動の展開

60年代の市民運動のなかから起こった私的な保育活動は、70年代から80年代にかけて、独自の展開をとげていった。この経過と、さらに、これらが近年の行政の施策に対して、さまざまなとりくみを行っていることに注目した。ここでは、さまざまな団体の活動を包括的に保育園運動ととらえ、本研究の焦点と位置づけて、調査・分析した。

ここで保育園と呼ぶのは、キンダ ラーデン（子供の店）とベルリンで呼ばれる、小規

模の託児所 / 保育所機能をもつ団体である。多くは集合住宅の1階にある使われなくなった店舗スペースを利用し、両親と子供と教育者の三者を運営主体とする。

キンダーラーデンは1970年にあらわれ、冷戦下のベルリンで行政に評価され、都市行政のなかに一定の位置を占めるにいたった。80年代の展開で特筆すべきことは、とくに移民家族への育児支援という機能を担うようになったことである。キンダーラーデンは地域住民の隣人関係を構築するひとつの核となり、都市再生プロジェクトとも直接に連続した。さらに、キンダーラーデンは、移民とホスト社会の双方の子供のための多文化教育を新たな課題として展開し、それを達成していった。

しかし東西ドイツ再統一後の政治的経済的状況の激変のなかで、行政による資金提供は、明らかに後退した。2000年代にはいつから、教育プログラム、保育制度の見直しが進められ、キンダーラーデンの教育 / 福祉制度としての位置づけは不安定化する傾向にある。キンダーラーデンを推進してきた人々の模索はつづいている。ただし、キンダーラーデンは団体によって成立の経緯、活動関心、運営規模、運営方針、さらに運営主体のバランスも、ひじょうに多様であることも明らかになった。キンダーラーデンについては、今後、行政の施策とともに、注意深く見ていく必要がある。

(3) 総括と今後の課題

これまでの研究から、調査地の現在の市民運動には、第一に、1960年代から展開した「新しい社会運動」の系譜を読み取ることができるとともに、第二に、1980年代初頭に劇的な高まりを見せた都市運動の系譜があり、それらが今日のプロジェクトに連続していることが明らかになった。後者の運動は、移民家族をとりこんだ市民運動を展開したことが、前者と異なる大きな特徴である。さらに、21世紀初頭の運動では、以下のような新しい展開がみられることが明らかになった。

たとえば、保育園(キンダーラーデン)運動は、1960年代の学生運動、新しい社会運動に起源をもつが、1980年代初頭の都市運動から新たな動きが起こっていて、その双方の系譜を現在の保育園に読み取ることができる。ただし、東西ベルリン再統一後の政治経済状況のなかで、保育園は新たな困難に直面しており、それぞれ独自の方向を模索している状況である。その様相は多様で、安易な総括を許さない。

また、近年の街路清掃運動からも、新しい運動のあらわれを見て取ることができる。外国人が集住する調査地では、80年代の都市運動のなかから、祖国を同じくする人々がともに助け合って市民運動を展開する動きがあらわれていた。21世紀初頭になると、出身国を異にし、さまざまな文化背景をもつ移民第

二世の人々が主体となって、文化的・宗教的な境界を越えた新たな隣人関係をつくりあげようとしている。

なお、本研究の期間内では分析しきれなかったが、新たにあらわれている動きもある。ひとつは、都市菜園で、ベルリン以外にも、世界のあちこちの都市で起こっている動きである。人の動員、計画性、組織力の強さにおいて、本研究で検討した市民運動の一環として検討することができよう。ふたつ目は、極端なジェントリフィケーションである。国際的な政治経済のなかで、現代の一部のグローバル都市では、極度の家賃の高騰が起こっている。調査地にもその傾向があらわれているが、目下のところ、市民運動は対抗術を見出せていない。この状況がどう展開していくのか、今後注意していく必要がある。

なお、本研究の課題については、2011年に、国立民族学博物館で国際ワークショップ「ヨーロッパ人類学の地平」を開催し、内外の研究者とともに、ヨーロッパのソーシャルなる概念について検討した。国際ワークショップを介して、ヨーロッパと日本の研究者ネットワークを格段に拡大することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

Akiko Mori, Introduction: Exhibiting Cultures from Comparative Perspectives, Special Issue Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe, *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4), 2014: 461-473. (査読有) <http://hdl.handle.net/10502/5317>

Akiko Mori, Exhibiting European Cultures in the National Museum of Ethnology, Osaka, Special Issue Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe, *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4), 2014: 475-494. (査読有) <http://hdl.handle.net/10502/5318>

Akiko Mori, Japan, In Regina F. Bendix and Galit Hasan-Rokem (eds), *A Companion to Folklore*, Blackwell Publishing Ltd, Chichester, UK, 2012, pp.211-233. (DOI: 10.1002/9781118379936.ch11) (査読無)

森明子, ベルリンのトルコ系移民の仕事とソーシャル・ネットワークについて、竹沢尚一郎編『移民のヨーロッパ 国際比較の視点から』明石書店、査読無、2011、32-50

Akiko Mori, The Anthropology of Europe and its Extending Horizons, *Minpaku Anthropology Newsletter* 32, 2011:15. (査読無)

Akiko Mori, An Anthropological Study of Europe: What Does It Mean to be Social?, *Minpaku Anthropology Newsletter* 31, 2010: 1-3. (査読無)

〔学会発表〕(計10件)

Akiko Mori, Introduction to the Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe, International Symposium, Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe, March 17, 2013, National Museum of Ethnology (Osaka).

Akiko Mori, Making Exhibition of European Cultures in Japan: A Case of Minpaku 2012, International Symposium, Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe, March 17, 2013, National Museum of Ethnology (Osaka).

森明子、ベルリンのキンダーラーデン運動について 1980年代から21世紀初頭へ、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月24日、広島大学(広島)

Akiko Mori, Introduction to the Anthropology of Europe and its Extending Horizons, International Workshop: The Anthropology of Europe and its Extending Horizons, January 9, 2011, National Museum of Ethnology (Osaka).

森明子、ドイツにおける民俗学/ヨーロッパ・エスノロジーの展開 テュービンゲン・マールブルグ・ゲッティンゲンを中心に、第851回日本民俗学会談話会、2010年6月18日、成城大学(東京)

〔図書〕(計2件)

森明子(編著) 世界思想社、『ヨーロッパ人類学の視座 ソシアルなるものを問い直す』、2014、296頁

Akiko Mori(ed.), National Museum of Ethnology, *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social (Senri Ethnological Studies 81)*. 2013, 210pp.
<http://hdl.handle.net/10502/4974>

〔その他〕

ホームページ等

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/22614011>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 明子 (MORI Akiko)